

『就実論叢』第47号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2018年2月28日 発行

# アイルランド雑感

**Some Thoughts on Ireland**

田 淵 博 文

## アイルランド雑感

Some Thoughts on Ireland

田 淵 博 文 (実践英語学科)

TABUCHI Hirofumi

平成29年9月7日から9月15日にかけてアイルランドを旅行した。1日の車での移動距離は、約250から300マイル(約400~480キロ)程度であった。旅行をするには何よりも体力が必要である。アイルランド訪問は今回で3回目であるが、今まで授業で教えていた場所を実際に訪問することによって新たな発見があったように感じられる。また、イギリス文学やアイルランド文学とゆかりのある場所は、テレビのBBC放送やBS放送などを通じて事前に調べていたが、「百聞は一見にしかず」といわれているように、その土地の醸し出す雰囲気や気候条件などを肌で感じる事ができたことは、私にとって大きな収穫であったような気がする。

アイルランドの首都ダブリンでは、James Joyce の『ダブリン市民』(*Dubliners*)の舞台となっているリフィー川周辺やそこに架かっているハーフペニー橋や J.J. (James Joyce) 橋やオコンネルストリートやグラフトンストリートなどを散策した。また、Trinity College の Old Library に展示されている8世紀に描かれた装飾写本の傑作『ケルズの書』(*The Book of Kells*)を見学することができた。それから、『ガリバー旅行記』(*Gulliver's Travels*)の著者の Jonathan Swift が司祭長を務めたことで知られる聖パトリック大聖堂も訪れた。



聖パトリック大聖堂

教会の中には入らず外観の写真を撮っただけだったが、その外周の壁にアイルランド生まれの世界的に有名な文学者の名前が blue plaque に刻まれていた。詩人の部門で3名、劇作家の部門で6名、小説家の部門で2名、風刺作家の部門で1名の計12名であった。作家の名前と生没年と代表作が3点ほど記されていた。以下にその作家の名前と生没年を列記する。

詩人として、James Clarence Mangan (1803-1849), William Butler Yeats (1865-1939), Austen Clarke (1896-1974)

劇作家として、Oscar Wilde (1854-1900), George Bernard Shaw (1856-1950), John Millington Synge (1871-1909), Sean O'Casey (1880-1964), Samuel Barclay Beckett (1906-1989), Brendan Behan (1923-1964)

小説家として、James Joyce (1882-1941), Ellis Dillon (1920-1974)

風刺作家として、Jonathan Swift (1667-1745)

時間の関係で、1991年にオープンしたDublin Writers Museumを訪れることができなかったのは残念でならないが、偶然立ち寄ったアイルランド国立美術館で、W.B. Yeats の弟で長年 (1910-1941) *Punch* に、W. Bird というペンネームで挿し絵を描いていた画家兼挿し絵画家の Jack B. Yeats (1871-1957) が描いた十点あまりの絵画 (油絵) を見る事ができたことは運が良かったと感じている。

W. B. Yeats といえば、元京都大学名誉教授で JACET (大学英語教育学会) 理事・関西支部長 (昭和47年から56年まで) であった大浦幸男先生のことを思い出す。私が就実女子大学 (現就実大学) に赴任したとほぼ同時期に就実女子大学で非常勤講師として京都から教えるにいられていた。しかも、非常勤講師の部屋が私の研究室の中にあった。3年間ぐらい同室で、先生が来られる昼頃には、お茶を入れて用意し色々英語全般に関して話をさせていただいた。昭和53年から61年まで日本イエイツ協会会長を務められていただけあって、温容で学者然とされていた。大浦先生の父上も三高 (現京都大学) の教授をされていた学者の系統の出であった。パイプをくゆらせゆっくりと語られる英国紳士のようなしぐさが、今ではとても懐かしく感じられる。大浦先生は昭和53年に山口書店から『イエイツの世界』というイエイツ研究会の会員12名が寄稿した論文の編者となっていて、自らも「イエイツ研究の発展」という論文を書いている。就実女子大学に非常勤講師としていられていた時にも、先生が発起人となって「詩の輪読会」を、英文科の先生を集め定期的 (月に一度) に R501 の教室で開いてくださった。私も2回英詩を取り上げ発表した記憶がある。当時 (昭和60年頃) は学生数もはるかに少なかったが、今ほどせわしくなく、教員にも学生にも時間的に余裕があり、学問をじっくり楽しむことのできた古きよき時代であった。就実女子大学での非常勤講師をされているときに書かれていた論文を、昭和62年にまとめて『イエイツをめぐる女性たち』と題して山口書店から上梓された。日本におけるイエイツ研究の発展に大いに貢献されたことが評価され、アイルランドの名門大学の Trinity College から、名誉文学博士号を授与さ

れた。授与式には就実女子大学でシェイクスピアを講じていた大澤猛先生も一緒にアイルランドまで同行し参列された。大浦先生が非常に喜ばれていた姿が、30年以上経過した今でも私の脳裏に鮮明に焼きついている。

私は耳学問はとても大切だと考えていると同時に、何時間でも英文学など全般に関して座談のできる人を尊敬している。大浦先生がまさにそのような人物であった。先生との語らいを通して、先生が本にお書きになっていないことをずいぶん教えていただいた。なかでも一番驚いたのは先生が京都大学の助教授の時に、英語音声学の本である Clifford H. Prator の *Manual of American English Pronunciation* を翻訳されたという話であった。私が赴任してすぐに英語音声学やゼミを担当するように言われたときに少し不安もあったが、文学一筋と思えた大浦先生が英語音声学を京都大学で若き日に教えられていたという話を語って励ましてくださったことが、私が30年以上に亘って就実大学で英語音声学を教え続けることができた要因であったと思っている。赴任したときに私が使用したテキストは J.D. O'Connor の名著 *Better English Pronunciation* で、30回の通年の授業で全訳した。その後、イギリスの学者の書いた英語音声学の本をテキストとして15冊ほど完読したが、アメリカの学者である Prator の本も2年間ほど使用した。一般的に言って、市販されている英語音声学のほとんどのテキストは、文節音素から超文節音素へと教えていくように配列されているが、この Prator の本はユニークで、超文節音素から文節音素へと教えるように組まれていた。音の連続やアクセントやイントネーションなどを重視し、母音や子音の音素などはテキストの後で教えるという編集方針は、英語音声学が話しことばの英語を理解するための手引書になればいいという意図があるように感じられた。現在では研究者は各自の専門分野の研究にのみあくせくしているようで、いい意味での遊びとしての学問（専門分野以外の学問をすること）がなくなってきて、真の意味での「英文学者」ということばも、死語になりつつあるような気がしてならない。

また同時期に同じく非常勤講師で「英語学特講」（集中講義）を教えに来られていた元東京大学教授の平野敬一先生からもアイルランドのことについて少しだけ教えていただいた。先生はカナダ文学の専門家であるばかりでなくイギリス文学全般についても詳しく、特にマザーグース研究においては日本における第一人者であるといわれていた。昭和47年に『マザーグースの唄』という題の本を中央公論社から出版されていた。私が赴任した最初の年に、先生の集中講義に学生2名と一緒に聴講させていただいた。それが縁でお話をさせてもらう機会があり、先生がアイルランドの Clancy Brothers のレコードはいいですよと話されていたことを思い出す。また、Joseph Wright の『英語方言辞典』は、英文学の本を読むときにとても役立つとも語られていた。私も Clancy Brothers の LP レコードを購入しさっそく聴いてみたが、アメリカにおける Bing Crosby みたいな存在の歌手であるような気がした。歌詞をはっきりと発音し、アイルランド精神や文化を明るく洋々と歌い上げているという感じがする曲ばかりで、一気に彼らのファンになり、それ以来彼らの CD を購入し、今

でも就寝前に聞いている。現在では、アイルランド音楽のファンとなり、Enya 以外にも Mary Black や Celtic Woman、男性では Clancy Brothers のほかに美しい声の持ち主である Tommy Fleming の CD を聴いている。

これらの日本を代表する学者を就実女子大学にお迎えできたのも、ひとえに当時英文学科長をされていた三宅忠明先生のご尽力の賜物であったと思う。先生もアイルランドやスコットランドの文学に造詣が深く、自らも大修館から『アイルランドの民話と伝説』、『スコットランドの民話』という題の本を出版されておられた。晩年、学問の総決算としてデアドラに関する資料を世界中から収集し、*Deirdre* という千ページを超える大著にまとめ、文学博士号を取得している。

私は Roald Dahl (1916-1990) に興味を持って長年研究しているが、今回のアイルランド訪問で、ダールの文学作品の創造のヒントになった場所もあったのではないかと勝手に思っている。北アイルランドの Belfast に行き、The Giant's Causeway に行く途中に広がる車窓からの荒涼とした眺めや、大西洋に面した The Giant's Causeway での溶岩が固まった数万本もの六角柱の玄武岩でできた自然の織り成す神秘的な景観を目にしたときに、ダールの『おやさし巨人』*The BFG (The Big Friendly Giant)* を思い出した。*The BFG* の挿し絵画家として有名な Quentin Blake は、挿し絵を描く際に、ダールとの話し合いの中でこの地方の景色が浮かんだのではなかろうか。ブレイクの描いた巨人たちが住んでいる場所の挿し絵をみると、大きな岩がぼつんとあり荒涼とした自然の背景が描かれているだけなので、何か関連性があるような気がしてならない。また、Galway から車で1時間半ぐらいの距離のところにバレン高原があり、石灰岩の丘陵が広がる不思議な景色や巨人のテーブルと呼ばれる巨大なドルメン（墓石）を目にしたときに、現地に来ないと巨人のイメージはわからないことを痛切に感じた。このバレンの語源は「石だらけの地層」という意味であるが、挿し絵画家の



The Giant's Causeway の風景





巨大なドルメン（墓石）

ブレイクが描く巨人の住む土地の背景に酷似していた。

昨年の2016年はダール生誕100周年でありダールに関する本がたくさん出版された。特筆すべき点は、ダールが母親に送っていたすべての手紙を母親の Sofie が保管しており、やっと日の目を見ることになったことである。*Love From Boy* という題で、Donald Sturrock が編集し、昨年 Blue Rider Press 社から出版された。

その中に1934年、つまりダールが18歳のときに The Giant's Causeway を訪れたと記述されていて、その場所を「すばらしい場所」(marvellous place) と表現し、そこで数枚の写真を撮っている。船でアイルランドとスコットランドを訪れたものではあるが、つい巨人が海をつたってやって来たのではないかという想像がはたらいてしまう。イエイツが編んだ童謡集の中に、「フィン・マックールという巨人」の話があるが、イエイツも創作の原点に The Giant's Causeway の荒涼とした殺風景な風景に感化され、創作作品を生み出したのではなかろうか。

次に長年アイルランドで訪れたかった場所は、John Millington Synge の本で有名になったアラン島である。アラン島は大きく分けて3つの島からなっているが、私が訪れたのはこの中で最大の島イニシュモア島である。ロッサヴィールからフェリーで約45分間ぐらいであった。諺にあるように「経験は最上の教師である」といわれているが、このフェリー (Rose of Aran 号) での船旅は決して楽しいものではなかった。波が高くもう少しで船酔いしそうになった。シングが『海に乗り出す若者たち』(*Riders to the Sea*) という本を書いているが、アラン島の漁師は強靱な肉体を持っていないと小船にも乗れないと思った。アランセーターは遭難しても、織り方でどこ漁師が着ているセーターか認識できるそうだがさもありなんと感じ入った。アラン島の人口は約800人、パブが4軒、警官は2人しかいないが、事件はほとんど起きていないそうである。観光客がほとんどで、狭い道を曲芸師のごとくマイ

クロバスや自転車がすれ違っていた。現地の人に聞くとアラン島を撮影した映画の中には相当間違いがあると述べていた。その中の一例が嵐やしけのときに現地の漁師は身の危険を案じて海に乗り出さないということであった。アラン島を報じた映画では、勇敢に漁師が嵐のときに海に漕ぎ出しているが、これは撮影していた監督から懇願され、無理やり危険を承知で海に出たということであった。それから徒歩でキルロナン村を散策し、その後ケルト文化が色濃く残り、断崖に立てられた古代要塞ドン・エンガスやセントキアラン修道院遺跡などを40分ぐらいかけて訪れた。海から吹きつける風の強さと時折吹き付ける雨とごつごつした岩場から眺める荒涼とした厳しい自然が印象に残った。このような一見過酷に見える土地にも人間の営みがあることに、人間の適応力のすごさに感嘆した。インフォメーションセンターのところに、'Experience the magic of the Aran Islands.'と書かれていたが、このmagicという表現の広さと奥深さに深く考えさせられた。

Galway から車で3時間半ぐらいのところに日本でも有名な「モハーの断崖」(The Cliffs of Moher)がある。「ライアの娘」や「マッキントッシュの男」や「ハリーポッター」などの数々の映画の撮影場所としても有名な場所である。高さが214メートルの断崖絶壁で、長さが8キロで、ヨーロッパでも高い断崖のひとつであると現地のパンフレットに記されていた。私が今回の旅行を通して新たな発見をしたのは、この断崖が海鳥の生息地 (largest seabird colony in Ireland) になっていて、ツノメドリ (puffin) やウミガラス (guillemot) やオオハシウミガラス (razorbill) などの海鳥や渡り鳥がここを通過したり、生息地としていることだった。アラン島を訪れたときも、あざらしの生息地 (seal colony) という表現が使われていて、30頭ぐらいいると書かれていた。それゆえ、「モハーの断崖」はバードウォッチングをする人にとっても絶好の場所である。約180種類の鳥がやってきて、アフリカなどの暖かい場所をめざす中継地点でもある。前方にアラン島とゴールウェイ湾がかすかに見え



モハーの断崖

ていた。

Sligo では、どしゃぶりの雨の中 Drumcliffe Parish Church 教会に立ち寄り、運よくイエイツの墓を写真に収めることができた。墓石には彼の生没年月日が記され、墓石には以下のような厳しい言葉が彫られていた。

Cast a cold Eye  
On Life, on Death.  
Horseman, pass by.

イエイツはアイルランドでは相当に尊敬されていることが、各地を訪れるたびに分かってきた。残念ながらイエイツの母親が住んでいたスライゴーの住居跡地には行くことができなかった。

それから、北アイルランドのベルファストから車で約6時間くらい行ったところに Cong という町があるが、多くのアメリカ人らしき観光客がたくさん訪れて

いた。この場所は映画「静かなる男」(The Quiet Man) のロケ地となった場所である。主役のプロ拳闘家を演じた John Wayne を慕う人が詣でているという雰囲気であった。市内



W. B. Yeats の墓



Quiet Man House 1951



観光をしていると、The Quiet Man Café や The Quiet Man Museum と書かれた建物があつた。小さくて落ち着いた静かな村という雰囲気であつた。市内観光の後、英国王室や各界の著名人に愛されている緑豊かな城である Ashford 城を訪れた。貴族の館（Manor House）などは夏の期間、一般の人や観光客も今では泊まることができる。案内してくださったガイドさんに尋ねると、このアッシュフォード城に宿泊する場合、夕食付きで1泊750ユーロ（約9～10万円）ということであつた。城の部屋数が400ぐらいで、窓の数が120ぐらいあるということであつた。とても広大な敷地に美しくたたずんでいるという風情で、静けさを愛する人にとっては最適な場所であると感じた。敷地内を散策していると、falconry school, fishing school, riding school, shooting school などという掲示が芝生にあつた。鷹の訓練や鮭や鱒を釣るためのフライフィッシングを学んだり、乗馬術を習得し調教できるようになることや貴族の趣味である狩りの仕方を学ぶ施設も城の中に併設されていた。



美しいアッシュフォード城

ダールとの関連性を述べるとすれば、ここの庭がダールの暮らしていたイギリスの Great Missenden の庭のたたずまいにととても酷似していた。ダールの仕事部屋に通じるつたの木の植え込み、庭の菜園の配置、ひょっとしたら、ダールもここを訪れ宿泊したのではなかろうかという錯覚に陥った。またこの城の周りの川は澄んでいてとても静かであつた。1分間ほど目を閉じ、耳を澄まし、皮膚感覚を使って風景や空気を感じようとしてみた。鮭や鱒やうなぎがこの川には、たくさんいるそうで、イギリスの Izaak Walton (1593-1683) が『釣魚大全』(*The Compleat Angler*) という本の中で、釣り人を通して垣間見える牧歌的な田舎の生活と静けさを強調しているのもさもありなんと感じた。

アイルランドといえばノーベル文学賞作家を4人も輩出している文学の国である。私たちは文学といえば、まじめに文学作品と向き合い客観的に分析し、深く研究するということを主眼にしているが、やはり実際に文学の舞台となった場所を訪れることは大いに意義がある

ことだと思う。コンピューターの発達した現代では、日本にいても多くの情報を手に入れることができるが、その土地の気候や風土といったものは実際に肌で体感して初めてわかるものである。

アラン島までの船旅で船酔いを起こしそうになったことや「モハーの断崖」やバレン高原や The Giant's Causeway に行って体感したことやアッシュフォード城での散策を通して感じたことなどは、私の勝手な思い込みかもしれないが創造の何らかのヒントになったと感じている。

日本では James Joyce の『ダブリン市民』(*Dubliners*) は大学のテキストとして使用できるが、『ユリシーズ』(*Ulysses*) や『フィネガンズ・ウェイク』(*Finnegans Wake*) などは難解で英語を母語としない人々にとっては難しいと一般的に言われている。しかし、『ユリシーズ』に関する演劇についてダブリンで偶然手に入れた小冊子には、以下のように記されていた。

Strolling through Ulysses!  
A 75 romp through Joyce's famous novel.  
Bawdy, irrelevant and great fun!

Romp や bawdy や irrelevant などの形容詞を使用していることから、この有名な小説は少しエッチで不敬であるが75分間の痛快娯楽作品に仕上がっていることである。またこの作品が上演される場所の名前が、The Stag's Head Pub Theatre と記されていた。Stag という単語が利いていて、男性達がほくそ笑むという含みを持っている。17歳未満は入場できないとも記されていた。それから、私の好きな The Clancy Brothers and Tommy Maken の CD アルバム のタイトルは、Finnegan の後にアポストロフィーが入った Finnegan's Wake となっている。

彼らは文学を机上の学問としてのみ捉えたり、祭り上げるのではなく、消化して日常生活の一部として、人生を大いに楽しむという発想を身につけていることを、日本人英語研究者は肝に銘じておかなければならないと思う。

それゆえ、今回の北アイルランド (Northern Ireland) とアイルランド共和国 (The Republic of Ireland) の9日間の訪問は、私にとって文学のあり方や作家の創作の原点やその作品を生み出す風土 (土地柄) などを知る意味で貴重な経験であった。

今年の平成29年 (2017年) は、日本とアイルランドが外交関係を樹立して、60周年の記念すべき年である。両国の友好関係がさらに発展し、交流が一層深まることを祈願して、私の「アイルランド雑感」を終わりとす。